

# アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること

— 貝澤正が編集する地域史『二風谷』の到達 —

新井 かおり

## 1 本稿の目的

現在に至るまで、アイヌ<sup>1)</sup>に関する研究（以下アイヌ研究と略す）におけるアイヌ側からの視点の不足とその重要性は、アイヌ・和人<sup>2)</sup>を問わず、多くの人びとによって指摘されている（箕島編 2011）。アイヌ史においては、「アイヌ側の根本資料というものが存在しない」（佐々木利和 2010：33）と、研究者にみなされてきた。確かに、抑圧されてきた歴史をアイヌが告発する語りは散見されるが、生き抜いてきた近現代までを視野におさめ、一貫した歴史叙述をおこなうものは皆無に等しい。近代史を扱うこと自体が、アイヌと和人双方にとって、あたかも禁忌であったかのように、である。

本論では、貝澤正<sup>3)</sup>（以下正と略す）の編集による地域誌『二風谷』を、アイヌ自身によって編まれたアイヌ近現代史の例として取りあげる。『二風谷』誌の体裁は、いっけん、典型的な地域史に異ならないようにみえる。しかし、『二風谷』誌が誕生した時代状況を考えれば、アイヌがすすんで自らを語るものがなく、また、語ることを期待されなかった近代を、地域の人々みずからが等身大の視点から書いているという意味で、今もなお他に例をみないものである。

『二風谷』誌がどのような意図で作られたかを理解するためには、その多くの部分を著述し、編者でもある正の人物像に迫る必要がある。以下の部分は正の著書『アイヌわが人生』よりまとめる。正は9人兄弟の長男として1912年に二風谷の貧

困家庭に生まれ、「シサム〔和人〕になりたい」、そのことだけを思い続けて成長した。1941年には、「アイヌもシサムもない日本国民」（貝澤 1993：5-6）として、「五族協和」のスローガンに託す形で、満蒙開拓団に入団する。これは当時、結核死の蔓延を背景にして、自然発生的にできた集落である二風谷がいまにも崩壊しかねないありようをみせつけられ、活路を見出さなければならぬという切迫したおもいからであった。差別とは無縁な土地で新たな共同体を満洲（名称当時）という客地で作りたい、という気負いもあった。しかし“開拓”が実際には現地の人びとの土地などの諸資源の収奪でしかない現実を知った正は、深い挫折を経験する。その後正は結核を患い、終戦を待たずに帰郷して、結核療養を続けながら一家の生計を再建することに全精力を注ぐ。満洲で得た農場経営の方法を生かすと同時に、新しい農業技術の習得を試み、「北海道でも指折りの篤農家」（萱野 1993：279）となった。そのかわら正は農地委員をはじめ地域の役職を務めつつ、地元の青年層をたばねて、二風谷の地域産業の展開を図る。もはや、どの地にも脱することができないと悟った正の実践がはじめられていく。ここには地域社会をその崩壊から守ろうとするかのような、切迫感があった。後にウタリ協会（現社団法人北海道アイヌ協会）の指導者となる起点がここにあるだろう。

正の、年を重ねるごとに積極性を増すアイヌの復権をめざした活動と表裏一体としてあるのは、体系だったアイヌ史編纂の取り組みである。これ

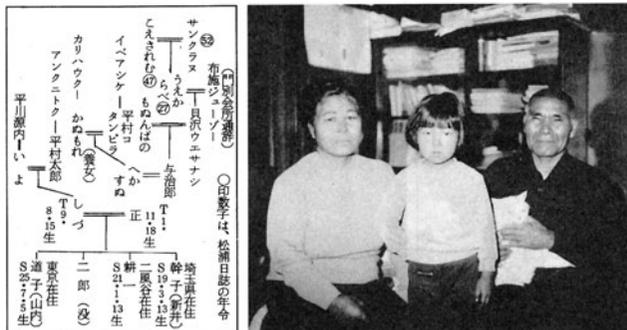
までのように他者によって語られるアイヌではなく、自らを歴史のなかに省察したものであった。正は生涯3回に渡って歴史の本の執筆・編集に携わった。そのうち『二風谷』誌は、もともと地域に密着したものである。同書は、ひろく社会に訴えるという質のものではなく、二風谷の住民のた

めの歴史の共有をめざしたものであったことから、外部によって積極的な評価を得ていない。

本稿では正の人間像に迫りながら、『二風谷』誌の編纂過程とその内容から、その意図を読み解き、『二風谷』誌がもつ歴史性を考察していきたい。

図表1 『二風谷』誌の貝澤正家

第1章 わが家の歴史



貝澤 正家

わたしが嫁に来たのは昭和18年2月11日でした。義経神社の拝殿で式を挙げ、次の日夫と共に満州に渡りました。列車からは窓の外を見えず、連絡船の甲板へも出されず、何日かかかって夫の任地につきました。

途中牡丹江駅でわずかの時間ホームに立っていたのが凍傷になり驚きました。北海道では想像もできない寒さなのです。

春先になって夫が病気で入院、養生したのですが、治すのには日本に帰る他はないと、夏には帰国、苦小牧で入院。私がつきそいました。新婚早々看病ばかりさせられました。あの頃は映画にも流行歌にも、大陸の花嫁の華やかさが宣伝されていたので、何の考えもなく娘心の憧れだけで結婚したのでした。

二風谷では夫正は9人弟妹の長男だったので、大家族で大変だったので。貧乏でしたが私の生家は水田農家で米のご飯だけは食べていましたのに、ここでは雑穀に馬鈴薯、南瓜が主食だったので、のども通らず困りました。

戦時中夫は病氣療養の傍ら山を買って炭焼きをはじめ、木を切った後には食糧作りや造林と、冬も夏も休むことなくこき使われたものです。

余りの苦しさは何度か死のうと思っただけですが一人残っている母親いよへの不孝を考え生きて来ました。長い間の無理がたたり病院通いをする体になりました。

(しづ)

## 2 問題の所在

本章ではアイヌと、和人のアイヌ研究者の双方の関係する時代状況を記述し、あわせて関連する先行研究を整理する。

### 2.1 戦前のアイヌ研究による認識

まず、戦前のアイヌに対する認識の水準をよく表す資料として、1989年に提出された北海道旧土人保護法の提出理由書をあげる。旧土人保護法とは明治政府がアイヌを日本国民に同化させることを目的に制定した法律であり、土地を付与して農業を奨励することをはじめ、医療、生活扶助、教育などの保護対策をおこなうもの、とされていた。

同理由書では「<sup>きゅう</sup>舊土人 [アイヌ]」は「<sup>きゅう</sup>皇化ニ浴スル日尚<sup>あさ</sup>淺ク其知識<sup>けいはつすこぶ</sup>ノ啓發頗ル低度」であり、故に「優勝劣敗ノ理勢」によって「内地移民ノ爲ニ占領セラレ日ニ月ニ其活路ヲ失ヒ空シク凍餒ヲ待ツ」ものとされていた（ウタリ問題懇話会1988：6）。満州事変から続く戦争を追認し、自己正当化を図るための国策イデオロギーである皇国史観のもとで、“異民族”は日本に“征服”されて当然の存在であり（長谷川2008：313）、アイヌについては蝦夷征服史観が支配的（榎森1982：11-13）であった。過去に“征服”されたアイヌはまた“滅びゆく民族”として、天皇の名のもとに救済すべき対象であった。

皇国史観による認識は、旧土人保護法に並行して制度化され、和人とは異なったカリキュラムによって実施されたアイヌ教育によって、アイヌにも浸透していた（小川1997）。正の父、与次郎は熱烈な軍国主義者であり、正も青年時代には学校教育で教えられた皇国史観を疑わなかったという（貝澤1993：63）。二風谷に在住していた医師で考古学者のN・G・マンロー<sup>4)</sup>との対話が、その思いこみをほぐすことになった。1970年に二風谷でマンロー記念碑の除幕式が行われた際、正は祝辞で次のように述べた。以下の資料は論者が資

料中から見だし、書きおこしたものである。

先生が生前私に何度か申されました言葉が思い出されます。それは、「アイヌに関しての日本 [の] 歴史はほんとうのことを書いて居ません。日本の学者は権力者の云いなりになって、科学的な真実を発表しません。私は正しい歴史を知って居ります」。(中略)先生の死後日本は敗戦となり神話の歴史の幕を閉じました。歴史は科学的に正しく書<sup>(ママ)</sup>改めていくことを思い、先生の言葉の意味が分<sup>(ママ)</sup>って参りました。

アイヌは“滅びゆく民族”であるという認識は、正にも浸透していたので、マンローの言葉は当時の正には理解できないものだった。しかし、尊敬する人が語るその言葉は、正のどこかに引っかかったまま残り、アイヌの歴史を考えるひとつのきっかけとなったと、正は歴史についてふれるたびに想起する。

### 2.2 アイヌ研究によるアイヌ差別の構造化

歴史学では戦後、皇国史観への反省から、資料を用いた実証主義に傾いていく（二宮2000：127）。だが、アイヌに関する資料はそのほとんどが18世紀の和人側から観察、記録された資料であり、それを用いた研究は、どうしても和人のもつバイアスの影響によってアイヌを見てしまうことになった（榎森1982：11-13）。一方でアイヌの口頭の伝承（口承文学）に関する研究は、標準語の創出を目的に（丸山2002）、金田一京助などの言語学者を中心に、戦前から引き続いて行われている。その研究者に次のような強固な認識が存在していた。

アイヌ研究の集大成とされた『アイヌ民族誌』は、北海道教育委員会に設置されていたアイヌ文化保存対策協議会において企画された。アイヌ研究を集大成し、社会の認知を促すものとして（現代企画室編集部1988：20）、各分野の専門家が分

担し執筆、編集したものである。その冒頭で金田一は、アイヌを「その風貌・体質は和人などとは全く異なり、しかも日本付近のどの方面にもこれと似た種族の生存がない全く特殊な存在である」（アイヌ文化保存対策協議会 1969）と断じている。同書の豊富な図録には、地域や採録日時などがほとんど明記されていない。各地のアイヌが同じ民俗によって、現在も前近代と同じ生活を続けているかのように、である。

『アイヌ民族誌』を代表とする当時のアイヌ研究を、1970年代に活躍したアイヌの評論家、佐々木昌雄は、アイヌは和人とは異なった“ホモジニアス”な集団である、という発想に支えられている（佐々木昌雄 2008 [1974]：206-218）、と批判した。マーク・ウィンチェスターは佐々木昌雄を受けて、金田一らの研究を、アイヌはあくまで客体化され非歴史的、汎地域的、かつ現代における過去としての存在であり、お互いに越境できないであるかのような想定がある（ウィンチェスター 2009）、とさらに批判する。

アイヌが歴史をもたないとされることは、すなわち発展がないとされることと、容易に結びつく。またアイヌは個人の顔どころか、地域の差異も見えず、和人とは全く異なる“人種”である、と想像されていた。このような発想は、人々に当時のアイヌの貧困を、社会的排除によるものではなく、“人種的”に和人よりも“劣位”であることの証左として捉えさせていた。そのアイヌ研究によるアイヌの“劣位”の“証明”は人口に膾炙し、一般人のアイヌへの差別視や排除をとまなう無視という態度と、アイヌの劣等感に根拠を与え、差別の構造化に加担することとなった。

### 2.3 アイヌによる意義申し立てとアイヌ研究の変化

このような視線に、アイヌはただ座して黙っているだけではなかった。1968年の北海道“開拓”百年の前後、様々な記念行事にアイヌの存在が無視されることへ、盛んに異議申し立てが行われた。

なかでも旧土人保護法の改廃運動は、同法が制定された戦前から、1992年に通称アイヌ文化振興法が制定されるまで主題だった。1970年に旭川市長だった五十嵐広三が同法の廃止を提案したことをきっかけとし、アイヌの中でも同法を差別撤廃運動の足がかりとして残そうというウタリ協会と、差別の象徴としての同法を撤廃しようとする旭川アイヌら、多くのアイヌを巻き込んで論争になった（東村 2000）。

アイヌによる抗議の多くは、アイヌ研究に対してその矛先を多くむけた。1972年には札幌大学で行われた日本人類学会・日本民族学会連合大会において、結城庄司らが公開質問状のビラをまいて会場を占拠したことは大きく報道された。結城は1977年には北海道大学経済学部の林善茂が差別的な講義を行なったと抗議し、座りこみを行なった（結城 1997）。前節の『アイヌ民族誌』に対しても、編者のアイヌ研究者らによって肖像権を冒されたとして、1985年にチカップ美恵子によって裁判が戦われ、1988年に和解された（“肖像権裁判”として知られる）。当裁判は名目こそ肖像権の問題だが、最大の争点はアイヌ研究によってアイヌが貶められることに対する問題提起である（チカップ 1991）。

アイヌによるアイヌ研究への抗議は、アイヌの主体性をいかに確保するかという問題を浮上させ、それは現在に至るまで一貫したテーマであり続けている（箕島編 2011）。だがアイヌにかんする資料は和人の統治者側から記録されたものがほとんどであり、従来の資料を用いた研究では、榎森進が言うように、和人の視点でしかアイヌ史を描けないというディレンマを、研究者は抱え込むことになる（榎森 1982：11-3）。その制約の中、多くのアイヌ研究者は口承文芸からアイヌの歴史意識を抽出しようとする取り組みを続けてきている（本田編 2010、坂田 2011）。

歴史学がさまざまな模索を続けるなかで、1980年代になると、“日本人論”ブームのなかでアイヌが特別な意味をもつアクターとしてとりあげら

れるようになる。梅原猛が行っていた日本人の起源に関する研究は、自然と共生を果たしていた縄文文化への関心から、アイヌがその直系の子孫であるとする（梅原・埴原 1982）。東村岳史はこの説を、アイヌを“人種”とみなしており「エコロジー論」とも癒着した「高貴な野蛮人モデルの変種に近い」と指摘する（東村 2002：237）。

そのような研究による美化と、そこから生まれた社会の脚光は、自らの表象を模索するアイヌにとって、魅惑的に映ることもあり、すすんでその表象を自身の表現として内面化する者もすくなくなかった。

正はそのころウタリ協会事業としてアイヌ史の編纂にあたっており、『アイヌ史の要（抄）』というパンフレットに、以下のように書いている。

和人とアイヌが起源的に一致するということがあるにしろないにしろ、和人のアイヌに対する耐え難い偏見や差別は、ここ数世紀以上にわたって存続されてきたという事実があるからであり、研究者の人種起源や民族起源の探求によって、それらの問題が解決できるという理由も保証もないということが明らかだからである。（貝沢 1984：1-2）

名指しにはしていないが、正には梅原らによる起源論が、アイヌを異質なものとして和人と区別する人種決定論に近く、それは決してアイヌへの差別視を緩めないであろうことに気がついていた。問題は、近現代に生きるアイヌである。にもかかわらず、アイヌに関する研究のほとんどが、前近代のアイヌをその対象として終わり、近現代を生き抜いている主体性のあるものとして描いていない。地域に生きる人びとの姿を近現代史のなかに自ら描いたのが『二風谷』誌である。

### 3 二風谷の概要と本論の方法

#### 3.1 二風谷とは

二風谷は北海道道南部、日高地方にある平取町びらとりに存在する、人口およそ 500 人規模で推移する、決して大きくない規模の集落である。二風谷はアイヌによって自然発生的にできた集落であり、現在でもアイヌの住民がその人口の 7 割から 8 割を占め、アイヌ文化が色濃く存在することから、多くのアイヌ研究の舞台となった。また、二風谷は住民たち自らの手によって、水田開発などさまざまな拓殖事業が行われた場所である（貝澤 1993）。まさにその土地に二風谷ダムの建設が予定され、正らその不当性を争ったことは、のちに裁判となり、アイヌの問題を広く社会に訴えた（いわゆる“二風谷ダム裁判”）。現在では二風谷アイヌ文化博物館や沙流川歴史館など諸施設も建設され、アイヌ文化の発信地としても知られている。代表的かつ象徴的なアイヌの集落であると言える。

#### 3.2 利用する資料と方法

正の旧宅は沙流川に沿った国道 237 号線のそば、集落の住民が上地区と呼ぶ集落の中心地と、下地区と呼ぶ農村地帯のほぼ中間に位置している。正亡き後、旧宅は長女の新井幹子夫妻と長男、耕一夫妻によって管理され、資料のほとんどは旧宅の書齋に集められている。論者は書齋の資料の利用を許され、2010 年度中は正の旧宅に住みこんで資料の基礎的な整理を試みた。

6 畳の書齋にはダンボール 2 箱ほどの原稿用紙や、53 冊のノート、14 冊の日記帳、36 冊の手帳、その他ファイル、アルバム、紙資料、手紙、蔵書などが、天井近くまで積み上げられている。資料を眺めると歴史に関して書かれたものの割合が多いことに気がつく。正が生涯、執筆あるいは編集にあたった歴史に関する本のうち主なものをまとめる。

そのほかの発表、未発表の原稿などもアイヌ史に関するものが多くを占めている。特に自分史を

図表2 貝澤正の関わった歴史書一覧（新井作成）

著者・編者名	出版年	企画年	タイトル	発行元	注記事項
渡辺茂・河野 本道編	1974	1968 (委託は1972)	『平取町史』	平取町	編集委員
貝澤正	1976.3-1982.5		「歴史をたずねて」	ウタリ協会	機関紙『先駆者の集い』連載、 計16回
貝澤正	1980.12.21掲載		「我が家の歴史」	北海道新聞	“ノンフィクション・北海道 に生きて”応募作品
二風谷自治会	1983	1978	『二風谷』	二風谷部落誌編 纂委員会	編集委員長
社団法人北海道 ウタリ協会	1988-9	1979	『アイヌ史 資料 編1』-『4』	社団法人北海道 ウタリ協会	編集委員長

含んだ家族史と、二風谷史を扱ったものが多い。本論ではこれらの資料と、『二風谷』誌にかかわりのあった地域の人びとへのインタビューを用いて記述を行う。なお、インタビューは了解を得て掲載し、インタビューイのプロフィールやインタビューの場所、日時などは全て注に記した。

#### 4 『二風谷』誌の編集・執筆の過程

本論で問題にする『二風谷』誌は、二風谷全体を見渡すカラー写真<sup>5)</sup>から始まる。それは二風谷の集落だけではなく、隣接した山と、沙流川、そしてダムに沈んだ川向という土地がほぼ均等大きさに写された、現在では見られない二風谷の様子である。北川大はその写真を「編者は、ここに写し込まれた四つの要素が二風谷にとってはどれも等しく大事だと言っているのではないか」（北川2003：65）と解釈した。

この写真を選んだ目的について、編集の資料やインタビューで答えは得られなかった。1969年に北海道開発庁（名称当時）が沙流川水系総合開発構想を公表しており、川向の土地はダムに沈むことが予測されていたので、これを記録に留めようとしたのではないかと推測できる。

北川が見たようにこの本には、まず、二風谷に

暮らす人々がその地域の自然と深く関係しながら生きてきたことを包括的に捉える視点が存在している。

#### 4.1 編纂の発案

二風谷の地域史の編纂は、1978年度の二風谷自治会の総会で、萱野茂<sup>6)</sup>の「おとしよりの生きている今、二風谷の歴史編纂を考えてみてはどうか」（二風谷自治会1983：1）という提案で始まった。当時の自治会長であった二谷貢<sup>7)</sup>が決議の際に、予算がないので集落の人びとに否決するようにと根回しをした、と語る。それでも「満場異議なく可決」（二風谷自治会1983：1）された。1968年の開道百年をピークに、全道的に自治体誌編纂の機運が盛り上がっていたこともあり（桑原1993：362-3）、住民たちが地域誌を作りたい気持ちを強くもっていたからである。

それ以前から正は、1968年に二風谷小学校の創立75周年を記念して編まれた冊子にある、編集者の以下のようなあとがきを「気にしていた」（二風谷自治会1983：324）という。

沿革などというものはやはり長い時間をかけて然も毎年克明に誰かが記録していくべきではないのだろうか。したがってこの仕事は

一刻の猶予があるものでもなく又この記念誌の発行だけで終るべきでなく部落の大きな仕事として今後も続けて行くことが大切で私もいづれ折 [を] <sup>(ママ)</sup>みて稿を改め部落沿革史をまとめたいと考えていますので [も] しこの外の記録として残しておくべき事件がありましたら是非共提供していただきたいと思ひます(記念事業協賛会 1968 : 34)。

正は「議決されたと聞き喜んで」(二風谷自治会 1983 : 324) おり、まず自治会役員に編集委員に専任され、さらに編集委員のなかで編集委員長に「最年長の故で押しつけられ」(二風谷自治会 1983 : 324)、選任された。正は 1974 年に完成した『平取町史』の編集委員を 1972 年から委託されており、1976 年からウタリ協会の機関紙「先駆者の集い」に「歴史をたずねて」と題した連載もしていたことから、適任とされたのであろう。

#### 4.2 当初の予定

正が二風谷誌の執筆に使ったと思われるノートは合計で 6 冊、その他にばらばらになった編集用の資料が 18 枚ある。編集後記で、正の「大学ノートに書きなぐった大半の原稿の中から」蓮池悦子<sup>8)</sup>が「必要事項を一字一字拾って原稿用紙の枠目の中に入れ」た(二風谷自治会 1983 : 325)、とある。

うち「貝沢正殿」と表紙に描かれたノートの冒頭にはガリ版刷りの B4 の紙が貼り付けてある。「第一回二風谷沿革史(仮称) 編纂委員会報告」というタイトルで、開催年の記載はないが、前後から 1978 年であろう。編纂委員長は貝澤正、副委員長は貝澤定雄、会計は松原俊幸、事務局担当は蓮池悦子、監査は二風谷自治会で、事務局は二風谷アイヌ文化資料館(名称当時)となっている。この紙には執筆の進め方について以下のような記載がある。

刊行予定は 55 年度中で、53 年度には各担

当者が資料収集を行い、54 年度中には具体的編集作業に取り組む。委員には一冊づつノート<sup>(ママ)</sup>を渡し、それぞれ自由に、思いつくまま記録してもらい、編集会議を積み重ねることによって、具体的な作業方針を進めていく。

作業分担の計画もあり、当初は計 17 名が作業に参加することが定められた。作業は以下の 14 に分けられ、それぞれ担当者名が記載してある。個人名は略して記す。

- 1) 公職関係
- 2) 農業団体
- 3) 役場関係
- 資料収集
- 4) 農業沿革と移住者の歴史
- 5) 学校沿革史
- 6) 交通・通信の歴史
- 7) 民芸品店沿革
- 8) 人口、面積、公共施設
- 9) 畜産変遷史
- 10) 旧地名の由来
- 11) 旧家人名
- 12) 生活文化の推移
- 13) 写真収集
- 14) 編集・進行にかかわる業務

蓮池を除き、編集委員はすべて当時の二風谷自治会の役員によって構成されていた。完成した『二風谷』誌では編集委員の名前が掲載されていない。項目ごとに執筆者と担当者<sup>(ママ)</sup>の名前があり、上記の人名と比べると、委員でありながらほとんど編纂に関わっていないとみられる人が多く、正と蓮池の執筆、作業量が大幅に増大している。「俺などはとても書けない、誰かがやるだろう」(二風谷自治会 1983 : 325) と関心を持たない委員もいた、と正はこのことを裏付ける。この紙の右ページには調べる内容をメモするようになっており、正の字で次のように記載される。

1. 二風谷が文字に現れた松浦武四郎の蝦夷日誌を基本として、二谷幸夫君の発見した二風谷の人名と係累をつなぎ合わせる。昭和 26 年頃二谷国松と久保寺逸彦<sup>(ママ)</sup>の調査によるものと思われる。
2. 昭和 9 年役場が全焼、戸籍簿を新規作成したのでどの程度正しくつかめるか。

3. 二風谷の人々と功績と人物評はどうか子孫がいるので影響を考へねばならない。
4. 明治22年平取村旧土人を平村を姓として戸籍届けをなす。(平取他8ヶ村史 89頁)
5. 二谷、貝沢は、地番は、□明治27年松崎順吉移住した1番地字名改正前後の地籍簿(連絡図)をつくる。

文中の松浦武四郎の蝦夷日誌とは、萱野が親交のあったアイヌ語地名研究者、山田秀三に有償で人名の解説を頼んで提供されたものを指し、「二谷幸夫君の発見した二風谷の人名」とは二風谷に住んだ経験のある言語学者、久保寺逸彦が二谷国松と共に作成したものといわれ、国松の孫、幸夫が自宅改修の際に発見したものを指す。

正は作業分担表11の「旧家人名」を割り振られており、この時点での正の作業予定はその内容に即したものとなっており、それ以上のものではない。

#### 4.3 編集の遅れ

この後、割り当てにかかわらず、原稿はなかなか集まらなかった。最大の原因は貝沢と蓮池をのぞくほぼ全員に執筆や編集の経験がなかったということである。

文章っていうのは、本っていうのはさ、地域の人がたっていうのは知らないしょ。こうやって役員で名前挙がっていても。文章的な要素だとか本のイメージだとかはみんなわからないのさ。みんな(どのように)編集したらいいかっていうのはわからない<sup>9)</sup>。

しかし、自治会費の中から予算がつき、年度が区切られる以上、予定年度が過ぎても発行されない地域誌の問題に「総会の度に質問が集中」(二風谷自治会1983:1)し、自治会の会長をひきうけた二谷が「一番頭のいたい問題に取り組むことに」(二風谷自治会1983:1)なった。

原稿が集まらなかった理由は、正が家系図を載せる決定をしたことにある可能性が高い(後述)。1981年3月14日の編集委員会について正はノートに「原こう集まらず、正のだけ廻し読み」と記載する。この会議で進捗が思わしくないことが確認され、正は気がめいったのか「雨が降った中を帰る。次の日程は協議せず」と記している。

#### 4.4 蓮池の関与

この本の完成に大きく寄与した蓮池は、フリーランスの「編集者、記者として東京で仕事をしてきた」が、1975年から萱野家に寄宿して出版原稿の清書などを手伝ううち、二風谷アイヌ文化資料館(名称当時)に収められた金成マツノート<sup>10)</sup>に魅せられ、その整理のために二風谷に書齋を建てて住んでいた(二風谷自治会1983:88)。そもそも『二風谷』誌の発刊は萱野の発案だったが、萱野は第二章の二風谷の地名部分を執筆する以外に編纂作業に関わることはなく、自らの替わりに蓮池を差し向けたのではないか。

1981年、蓮池はいったん辞表をだし、その時は慰留されたが、1982年の2月18日にも、正の「校長と教頭の手を借りて原稿を原稿紙に清書、必要とするものを集めることとし、学校を借りてみんなで少なくとも3月末までにまとめたい」という提案に反対し、あわせて自分の作業についての報酬を要求、辞表の再提出をちらつかせた、と正のノートに記載されている。この蓮池の心情について、当時の編集委員はこのように語っている。

蓮池さんにすればぜんぜん関係ない部落史、あの当時は悩んでいたと思うよ。ぜんぜん違う分野の仕事をやらされていたような感じでしょ。だからそれがこっちのほうに振り向けられてこっちのほうの手伝いになって、ぜんぜん仕事にはならないし、本来の姿に戻りたくても戻れない、っていうのはあったと思うんだ。(中略)それが一番の理由。記憶するのは蓮池さんが何しろ全部やってしまった、

それに（住民が）おぼさってしまったっていうのはあるんだ<sup>9)</sup>。

を使うことになって俺の名前が（編集委員として）入ったのかね<sup>9)</sup>。

このように推測される蓮池の不満が辞表提出や報酬の要求などの形で現れたので、同年2月23日に再び開かれた編集委員会で「蓮池提案をどうするか、議論百出」と正のノートにある。委員会は報酬を4分の3に値切り、それ以外の要求も承諾し、改めて編集を依頼することを決めた。翌日、正と二谷、貝澤定雄の三人は蓮池宅を訪問し、承諾を得た。

『二風谷』誌の出版費用は二風谷集落が共同で所有する耕作地の休耕保障費が充てられた（二風谷自治会1983：276）。作業の分担ばかりではなく、『二風谷』誌発刊の経済的基盤もまた、二風谷の歴史にその由来が認められるものである。

#### 4.5 『二風谷』誌と地域の公共機関

正の提案は、二風谷小学校が創立以来、地域と深い関係があったことを前提にしている。戦前の二風谷は学校を中心とした集落であった。二風谷小学校の校長は「コタンコロクル（村の長）」のように「生まれた子供の命名、役場への届け出、役所の交渉と地域内の取りまとめ」まで様々な役割を果たしていた（貝澤1993：36）。また父兄や生徒も「校長の命令一下、手足のように働くのが当然」（北川2003：143）だったと言う。

### 5 『二風谷』誌の叙述

#### 5.1 正の二風谷史ノート

「貝沢正殿」ノートの最後には「貝沢正原稿もくろく」と題された3ページの記述がある。それぞれ二風谷の歴史①、②、③にわけられてリスト化されている。そのリストに対応するノートも三冊発見されている。

戦後はそこまでの関係ではないが、恒例として二風谷自治会の事務局は小学校の教頭が勤めることになっていた。当時のPTA役員たちが中心となって詳細な学校沿革史『創立七五周年記念誌』を学校でまとめた経緯がある。正の提案は地域史の編纂が進まないことに業を煮やしてのことであろう。だが、転勤の頻繁な教員は二風谷の歴史に知識が乏しいと思われ、もし正の提案どおり教員の関与が実現していたら編集に困難をきたしたはずなので、その意味で蓮池の抗議は的を射たものだろう。

正のノートと『二風谷』誌を比較してみると、正のノートにたてられたテーマの40項目は、タイトルを変えるなどの編集を経て、そのほとんどが『二風谷』誌で使われたものと一致する。『二風谷』誌で削除されたものは、産業史や事件とは関係がない、ごく私的なもので、現在のインタビューの対象とならなかった人に対する思い出を記した部分である。当初のまずは「自由に、思いつくまじ記録」する、という執筆の方針によって、掲載に至らなかった部分がノートにあるのだろう。

地域と公共機関の深い関係は小学校以外にも、松原が運営している簡易郵便局との間にもあった。

作文は正さんだけど、その原稿見てあれ印刷（するとき）さ、この文面かやした[変更した]ほうがいいとか、訂正文、そういうのは蓮池。編集できたもの見ればね「なるほど、蓮池えらい」と（思った）。訂正して加えたり文面入れたり、そういうのは上手。印刷するとなりゃ何回も調べていかんばだめなもんだ。いなかったらできなかった<sup>7)</sup>。

たまたまうちの簡易局あったしょ、だからお金の出し入れするのに平取までいなくて（都合が）いいってことで、二風谷の簡易局

ノートの相当のページには蓮池のものと思われる赤字が入ることから、『二風谷』誌はその多く

が正のノートの基本とし、正の私史のようなものを、蓮池の編集によって一般化されてできあがったものだと見ることができる。

## 5.2 家系図掲載の決定

注目すべきは、「貝沢正殿」ノートの34ページで、11月24日に（前後から1978年であろう）編集委員会が開催されたとのメモがあり、その日に「一戸一頁を基準として家系図とか写真をのせては」という方針が定められた、とある点である。掲載の対象者は「部落全員が参加する方向で、住民登録をしているもの」であり、自治会費を徴収している以上、名簿は整備されており漏らされる人はいなかったという<sup>11)</sup>。

この話し合いの参加者は貝澤正、蓮池悦子、貝澤耕一、船越光次の4人だけであり、それぞれの関係を考えて、この方針は正以外に発案をし得ないものだろう。1戸1ページで家系図と家族写真を掲載という方針で編纂された地域史は、管見では見当たらない。家系図掲載の方針は、そのままアイヌを指し示すことになるものであり、現在でも差別・被差別感が伴いやすい。正は1972年出版の『明日に向かって』の座談会で、「教育委員会で小学校三年生が使う社会科の副読本を作ることになった」時に「地名の由来の説明」に「アイヌということばを使っているかどうか」ということが、アイヌの町議会議員3人に相談されたことを語っている。結局この時、正は「“アイヌ”と使うべき」と主張したが「後の二人は、三年生の子どもに対して、アイヌと教えていいか、どうか」となり、「最後に先住民と決まった」と言う（郷内・若林1972：189）。アイヌという民族名称すらタブーとされる7年前の状況を考えて、アイヌが住民の7-8割を占める二風谷であっても、ルーツがわかる家系図を載せることは覚悟がある方針であった。この正の構想が実現したことから、現在でも『二風谷』誌は取り扱いに注意を要する書物である。

これは重要な決定だが、その翌年の総会資料に

記されておらず、総会の決議を経た形跡がない。正は決議という手続きを経てはこの決定に対して二風谷住民の総意を得られず、可決されないことを予測していたので、あえて決議を通さなかったのではないだろうか。

資料上では写真と系図を掲載することを通知したものは1980年3月が最初のものであり、取材協力の依頼である。この依頼書には「記録に残したい家族の歴史 思い出 家族の生没年月日 転出した家族の消息等々」を聞き取りたい、とあり、当書の内容に沿ったものである。

## 5.3 インタビュー調査

さらに一冊、「二風谷の家の歴史 1982.1.15-2」と題されたノートがある。ノートの右端にはインデックスが立ててあり、それぞれ日付と取材内容が記されている。内容が産業史などに振り分けられている部分もあるが、この取材が『二風谷』誌の一章に結実していることは、なまなましく伝わってくる。

このノートの表表紙の裏に原稿用紙が貼ってある。そこには訪問日ごとに、訪問人数のうち許諾者数、再訪問者数と、拒否者数がそれぞれ記しており、拒否者の名前も書かれている。それによると1982年1月15日から2月6日までの間、18日間で、一日に最小で3軒、最大で16件の訪問をした、と記されている。戸数138戸のうち、船越が親戚の家3軒を訪問したのと、直接家族史を書いた数人をのぞき、他はほとんど正が訪問をし、執筆をした。上地区など住居は密集しているものの、一日につき平均8軒近くを訪問しているのは少ないとはいえない。一日で20-30軒の家を訪問するのは自治会の仕事では当たり前だったとい<sup>7)</sup>、そのことが想定されていたのかもしれないが、これは連絡事項の伝達ではなく、聞き取りである。当初の作業予定を超えた結果であった。そこまでして正は二風谷という集落到に住む全員をなんらかの記録に残したい気持ちがあったのだろう。

こういう世帯が、家庭があったよ、っていうことを、載せていない人はたぶんいない。本を作る時点で住民であったのに、いないことになってる人はたぶんいない。詳しいことは載せてほしくないっていうことでも、この世帯があったよ、っていうことは最低（載せている）ね<sup>11)</sup>。

船越の語るように、正の調査は悉皆調査ともいえるほどの性質のものであった。正の人に対する扱いは、第五章の資料編で、二風谷小学校の卒業生名簿や自治会など人名簿が複数あることにも表れている。インタビューや掲載を拒否した人でも、二風谷住民であれば、どこかに先祖や家族の名前を見つかることができる。死者をも含んだ二風谷の人びとの歴史を捉えるのが、正の意図だったのだろう。

#### 5.4 産業史

『二風谷』誌ではいわゆるアイヌ史と考えられるような、アイヌに特有な事件に関する記述は、第三章の歴史年表にしかない。当書で最もボリュームがあるのは第四章の産業史である。そこには色濃く地域住民の足跡が残されており、地域の住民にとっては何よりも身近で、必要性があり、過去ではなく現代に生きる歴史であろう。

農業で最も詳しいのは稲作の歴史である。1904年に和人の移住者、松崎順吉が開田し、地域住民に苗を配ったことを始めに、証言を挟みながら、誰が、いつ、どこで、どのような技術で稲作を続けていったかをたどっている。二風谷の稲作の歴史は同時に、奥地の森林開発によって幾度もおきた沙流川の氾濫の都度、住民が翻弄された歴史でもあり（二風谷自治会 1983：176-186）、両者は重なるように叙述される。

次に時代ごとの作物の栽培の変遷が、2・3年でほとんど栽培を終えたミブヨモギのような作物まで含めて、耕作方法と共に記されている。水稻以前の作物の耕作方法と、アイヌ語名とその食べ

方にも一節がもうけられる。牧畜や、林業、観光業などの商業についても詳しい（二風谷自治会 1983：175-246）。そのうち養豚の歴史の歴史を紹介する。戦前、豚は各戸に1-2頭ずつ飼育され、「正月用のご馳走に」するか、売って「子供用の正月用晴着」の購入資金に充てていた、と正は証言する。戦後は二風谷の有志が平取町に要請を行い、町の保証によって北海道社会福祉協議会からの借入を得て、二風谷養豚組合を結成した（二風谷自治会 1983：200-1）。戦後の養豚事業は正が取りまとめ、責任者となっていたが、結局は失敗し、組合は町に移管された。正は自らの失敗を記すことに臆さない。

和人の移住とその影響についても漏らされておらず、前述の稲作のように、二風谷の産業史はすみずみまでアイヌと和人が協同する歴史でもあった（二風谷自治会 1983：211-215）。アイヌと和人で構成される地域の住民が、時々の情勢や事件に翻弄されながらも、戦略を駆使して生き抜いてきたことを、『二風谷』誌は産業の小さな変化から描き出そうとしている。北海道の前近代において、アイヌと和人が時には協同し、時には対抗しながら生きてきたことは明らかだが（モーリス＝スズキ 2000）、アイヌ史において和人は着目されず、統治者としての姿を表すにとどまっていた。『二風谷』誌はそうではなく、生活者としての和人がアイヌと共に暮らす姿を叙述する。

## 6 『二風谷』誌の評価

### 6.1 掲載拒否の理由

『二風谷』誌の「わが家の歴史」の掲載拒否者は、当時の二風谷の全138戸のうち14戸しかない。掲載拒否の理由に『二風谷』誌の評価が判明することを期した筆者に、船越はこう語る。

詳しいことはあくまでもプライバシーの問題もあるからね、そういうところでは明らかにしはしない、あくまでも反対拒否している人は

載せないっていうね、インタビューで載っているとというのは、そこは問題ないから載せるわけだし、嫌だっていうなら載せない。(——載せないことの理由の追求は?) しないしない。それをやっちゃうと問い詰めるような感じになっちゃうから。聞かないのでわからない<sup>11)</sup>。

正のノートに書かれており拒否判明したもので、教員宿舎に住む二風谷小学校教員家庭4戸は、学校誌に氏名の記載があるから、郷土史では必要ないとある。教員は転勤を繰り返し定住しているといえないので、そのような判断が生まれたのだろう。分家はしているが兄弟のところにあわせて載せてほしい、という理由もある。

このような個別の理由を除き、推測できる掲載拒否の理由のほとんどは、家系図や写真を載せるという、正が決めた編集方針にあったという。

途中からね、問題もあったんだ、こういう家系図載つけるとかさ、いろいろ。結局プライバシーの問題になるよ、っていうことになって載せる人は乗せてもいいと、承諾を取ってやるべ、っていう形で最終的に俺は言ったような気がするな。(中略)それで何度も載せる、載せないっていうのはけっこう、ずっと最後まであったような気がする。それは俺何回も記憶あるもん<sup>9)</sup>。

たとえ掲載を承諾し、インタビューのまとめを正に任せた人であっても、家系図への抵抗は根強かった。

本来、その場所ではインタビューしてこういう感じってあるんだけど、あとのまとめっていうのは、任せて、好きなように書けよ、ただ家系図やなんかは、俺の代で終わらせてくれ、そこには載せたくない、っていう人はいたのさ、俺もそれは肌で感じていた<sup>9)</sup>。

やや意外だが掲載拒否者は、アイヌの血を引く家庭よりも、割合としては和人の家庭が多い。船越は2010年に出版された同じ平取町の集落、<sup>振内</sup>振内が編纂した地域史について語ることで、その理由を説明する。

そんだけね、そういうとこに載せる内容にしたって、『二風谷』誌もそうだと思うんだけど、全員が手を挙げて賛成して協力してって、もしそうであってもね、いろんな考えの人がいるから。ましてやそれが載ってしまったらもう残るもんだからね、「よく考えてみたけれどそのまんまじゃまずいわ」とかいう人もいるしね。その事実はそのものであっても、「そのまま載せられたら困るんだ」っていうふうな、当然あとで思いついて(撤回する人)もあるしね、振内の場合もそうだと思うよ。(——振内は家族史についての記載があるわけではないですが?) それでもそういう問題がおきてしまうのだから<sup>11)</sup>。

一般的にそのような問題が起こり得ることは想像されるので、『二風谷』誌はなおさら問題が大きかったのだ。なお、『二風谷』誌の拒否理由の一つで判明しているのは、一章の「わが家の歴史」欄の掲載を拒否したが、<sup>ふくいち</sup>五章の資料編の証言集には掲載を許諾している貝澤福市である。

二風谷の歴史の編纂計画は聞いているが、どうせ歴史とはきれいな所だけで、功罪を正しく伝えないのだろう。例えば町議会議員として地域発展に尽くしたと書くと思うが、実際は町民のために何をやったのだ。俺はそれが気に入らないので協力もしないし、もちろん参加もしない。(二風谷自治会 1983: 284)

この前の段で貝澤福市は沙流川奥地の乱開発によって住民の受けた被害や、それに対して指導者層が住民を代弁しなかったのに、「二風谷アイヌ

は勤労意欲がない。だから貧乏している」と言ったことなどに怒りを表明している<sup>12)</sup>。福市にとって「歴史」とは、やりきれない怒りなど住民の気持ちを含みとるものではなく、美辞麗句を連ねた空疎なものとして感じられていたのである。福市のこの主張は、正の二風谷ダム問題での主張と重なるところもあり（貝澤 1993）、福市の主張をこのような形で掲載したのは、正がその主張に賛同するところもあったからではないか。ただ、正は福一とは異なり、歴史を美辞麗句として関わらないのではなく、自ら納得のいくものに書き改めようとする意思をもち、それを実行した。

## 6.2 『二風谷』誌のはらむ問題

刷り上った『二風谷』誌を受け取ったのは1983年4月20日であり、この日に二風谷自治会の各班長から配布された、と正は記す。冊数は500部で、編集委員には報酬代わりに役割に応じて5冊から15冊ずつ送られ、二風谷住民各戸には無償で、合計120冊が配られた。その他は有償で正、萱野、蓮池を通じて道立図書館やウタリ協会など公共の施設と、個人では二風谷に関係の深い研究者や作家、二風谷に住んでいない親戚などへと送られている。

この冊子は一般個人には非売品である。家系図や写真を載せると決めた当初から、プライバシーの保護のため、松原などによって提案されたからである。しかし、それでもなお事件はおきかねないものであった。

系図がね、これでね、やっぱり差別問題出たのさ。これで俺もしばらく悩んだんだわ。学校でも平取の図書館でも、中央公民館にあったからね、そこで閲覧できるところにあったのさ、これで『二風谷』誌をみていて、結局ある子供がアイヌの子供だって、ちょっといわれて悩んだっていうあれが。なんでもね、教育委員会もほうの問題になったのさ、それで鍵かけて（キャビネットに）しまったのさ。

読みたい人は鍵開けて読むっていうことが、確か一時あった。これ出して何年かたってからかなあ。（中略）だからこれやってさ、この時代はさ（例えば）うちの娘のときは俺が親だから（本人は）判断しないわけでしょう、だけど子供が大きくなってきて初めて中学とか高校とか入ってさ、こんな名前出さなかったら、いじめられることもないだろうし悩むこともなかったろう、と思うんだよ。だってこのときだったら、うちのこんな小っちゃい子供なんて、（掲載の可否は）わけわからんしょう<sup>9)</sup>。

松原は家族単位で掲載をすることが、判断力のない子どもにまで差別を受ける契機を与えることになったことで悩んだ。正の発案であっても編集委員として松原もその責任を痛感する。論者は教育委員会にこの差別事件について確認をしたが<sup>13)</sup>公式にはそのような事実の記載はなく、当時の教育委員の記憶にもないという返事であったので、果たしてこれは事実であったのかどうかは判明しない。なお現在の平取の図書館では『二風谷』誌は開架においてあり、誰でも閲覧することができるようになっている。

当時も今も二風谷の住民はアイヌの割合が多く、経済力や政治力を持ち、二風谷の子どもはアイヌであることで受ける差別から守られて育つことができる。だが1983年当時の状況を「アイヌということばはタブーに近かった」と、二風谷に在住していた本田優子が書いているとおり（本田 1997：64-65）、それはなおも敏感な問題として存在していた。また、中学校登校のために平取町の本町に通うようになると、そこでは全く違う環境が現れ、差別を受けやすくなってしまふことは、1990年代の経験としても語られている（川上 2010：19）。北川は1992年ごろの平取町の本町の和人は、「住み分けをしているつもりで」アイヌを忌避し、それがアイヌにとっていかに脅威であるかを考えてみようともしない、と書いている

(北川 2003 : 185-187)。

このような問題がおきかねないことは容易に想像がついたはずだったが、結局は正の主張が通ることとなった。

### 6.3 『二風谷』誌の評価

問題を含みながら発刊された『二風谷』誌だが、現在地域の住民にはどのように評価されているのだろうか。船越は冷静な意見を述べる。

普通のところでもこんだけの個人的な、プライバシー的なことを載せて、みんなが「いいよ」っていかどうかは、たぶん反対する人もいるだろうけど、特にここの場合はアイヌ民族っていう偏見みたいなものがあつた時代に、よくできたなあっていう。載した人が皆さん「良かったなあ」っていうのか、逆にこのせいで知られてしまった、っていう人も当然あつたか知らんしね、こりゃなんとも、歴史的に価値のあるもんだ、いいもの作つたって評価が出せるかって言うとなんともいえないね<sup>11)</sup>。

二谷はこの本が出版された際には「皆が大喜び」し、協力を拒否した人までが本を欲しがつたと語る。出版当時の平取の雰囲気はこのようなものである<sup>14)</sup>。

平取に自治会長会議ってあるんだけど、みんなぶつたまげてね、「二風谷って、まあ、すごい」って。この本は誰かのやつ見してもらって、「二風谷はすごい」。開拓当時って俺のじいさんは明治 25 年で小学校で卒業のあれで出てるんだけど、「すごい」ってみんな。学校沿革みんな思つていても予算もないし資料もないからできないんだ、思つてもできない、なかなか議決とりたくてもできない。わしは「すごい」って褒められたんだわ。やっぱりみんなかねてから思つてるわけだね、明

治 15 年から 25 年に北海道に入植して大きい立木ぶつたおして畑作りしてって苦勞ばかりして、わしらは先住民だけど、だから沿革史書きたいわけだけど、実現したのはうちだけなんだから<sup>7)</sup>。

現在の自治会長であり、アイヌ協会平取支部長である木村英彦は高い評価を与える。

この本はすごくいい本だと思う。あの人とあの人親戚だったんだねとか、二風谷に来たときの経緯とか、俺らとかは葬儀の委員長とか多いわけだ、その人はどこから来てっていうのは必要だ。改めてみたときにその人の考え方が変わったりする。二風谷の人は(この本を)大事にしてると思うけどな。来歴もわかるし、二風谷のそのときの状態もわかるし。(—わかることが自信につながるということですか?) 当然それはあるわな。これは俺の考え方だけどな、こういう本が作られてるっていうことが、他のところにはないわけよ。二風谷の中の誇りというのは、アイヌがこういうものを、きちっとした形で平取町の中でわざわざ作ってるということがすごいよね<sup>15)</sup>。

木村は、本人が自治会長のうちに、『二風谷』誌の改訂版を作成したいという意気込みをもっている。共同耕作地の土地改良区に対する借金が終わったので、財源の確保も容易という理由もある。『二風谷』誌編纂の意図は経済環境まで含んで、現世代に受け継がれているのである。

## 7 結論

当書の性格をよく物語るのは第一章の「わが家の歴史」であろう。前述のとおりこの部分は正が強引な手法を用いて貫いた方針によって描かれている。アイヌの個人の人生を訊ねるインタビュー

集は数多いが、それらはしばしば聞き手にとってアイヌにふさわしいと思われる語りや、アイヌ差別に関する語りが強調され、日常のアイヌのいきいきとした姿は背景に退く（関口 2007）。

『二風谷』誌のほとんどを正が取材して書いたのにもかかわらず、語りが一人称であったのは、聞き手と語り手の間の隔たりのなさである。アイヌ・和人にかかわらず、それぞれの人生におきた事件や、生活の上での喜びや苦しみが、個性と多様性をともなっていきいきと描かれる。先祖について語る人も語らない人もいるが、それはアイヌが語るわけでも和人が語らないわけでもない。『二風谷』誌はアイヌの過去や和人を区分けしながら叙述されてはいるものの、それでも民族の区分線がそれぞれの価値を定めてしまうような人種論から自由であった。

### 7.1 『二風谷』誌を可能にしたもの

当書は従来のアイヌ研究に対して、直接に批判をしているわけではないが、当書の発想そのものがアイヌ研究への批判になっている。それを可能にした条件の一つとして、正がふだん記や自分史の運動にヒントを得ていたことが挙げられるだろう。

北海道のふだん記は士別市が中心地であり、正は機関紙を取り寄せて購読していた。また士別のふだん記の齋藤昌淳は色川大吉の影響のもと、市史の編纂のために自分史を書き入れられるようになっていた年表を市民に配っていた（色川・芳賀・斎藤 2006：170-1）。正はその年表を齋藤から取り寄せたことが手紙から判明している。ふだん記、自分史運動の、リテラシーの階級性を否定した「下手に書きなさい」という勧め（小林 1997：47-49）は、歴史学の教育を受けたことがなく、文章の素人である正を勇気づける役割を担ったのではないだろうか。

もう一つの条件として、北海道の民衆史の掘りおこし運動の影響が挙げられる。船津功のまとめによると、北海道の民衆史運動はそれまでの歴史

学では具体的な人びとを捉えられない、という反省から出発していた。北海道の歴史の特徴は、多くの弱者、女性や、アイヌやウイльта、朝鮮人などの諸民族が、開発によってしわ寄せを受けていた一方で、それを明らかにする歴史資料が限られていることである。民衆史では多くの弱者が生きた歴史を重視し、資料を発掘するために、それまで歴史学の方法としては用いられなかったインタビューを多用していた（船津 1982）。

民衆史発掘運動はアイヌの権利回復運動と共鳴していた。正が民衆史発掘運動のシンポジウムなどに多数出席していることは、日記帳などからも確かめられる。また、北海道の民衆史運動の中心人物である小池喜孝から、講演を頼まれていることが、残された手紙から確認できた。蔵書には民衆史運動に関連する当時の著作で、直接アイヌに関係しないものも数多くもつ。このことから正が民衆史運動のもつ発想や方法に高い関心を示していたことがうかがわれ、『二風谷』誌の執筆・編集の参考にしたと思われる。

### 7.2 研究の意義

『二風谷』誌と民衆史には大きな違いが存在する。それは編集の代表である正が二風谷という地域でその歴史の当事者であったということである。正は、当時多くのアイヌが自分の血筋を肯定できずに恥じ、その結果自らの尊厳を確保しないということが、自身に照らし合わせるまでもなくよく分かっていた。また、和人のなかにも二風谷に住むにいたった自身の境遇を恥じている者がいることも、よく知っていた。だからこそ、様々な軋轢を抱えながらも『二風谷』誌をまとめあげ、家系図やインタビューを掲載することによって、それぞれの出自をあるがままに示し、その多様な内実を示すこと自体が、あらたな“歴史”の創出作業となった。

本論ではまず、アイヌ研究が現在もなおアイヌの主体性をいかに捉えるかに注意を向けながらも、苦慮をしていることを捉えた。そして正の『二風

谷』誌が、その一つの回答として、個人のもつ多様性と、その積み重ねである地域すなわち生活の共同体を中心に据え、地域史をみずから編んでいくなかで、主体というものをたちあげていることを、経緯と共に論じた。アイヌ研究にたずさわる者だけではなく、アイヌの主体化というテーマに向かう人びとにとって意義があるものであろう。

(了)

### [注]

\* 『二風谷』誌はあくまで非売品として作られたものであり、引用に際して論者は各人への許諾を得た。本論文の引用にあたってはプライバシーに触れる部分について、十分な注意を要請したい。

- 1) 本稿でアイヌという場合は近代に北海道に居住し、国家の各種制度によって“アイヌ”として定義され、“アイヌ”として扱われる人びとのことを指す。
- 2) 和人とはアイヌに対する多数派“日本人”を指す。
- 3) 貝澤正 (1912-92)、二風谷生まれ。平取尋常高等小学校高等科卒業、1941年開拓団員として満州に渡り、肺結核を患い2年後に帰国。造材人夫や農業で生計を立てながら、農地委員、農協理事、平取町議会議員、二風谷アイヌ文化資料館(名称当時)館長、ウタリ協会(現アイヌ協会)副理事長などを務める。
- 4) Neil Gordon Munro (1863-1942)。イギリス、スコットランド生まれの医師、人類学者。日本へ帰化し、1932年から二風谷に住み、地元のアイヌに施療する傍ら、アイヌ文化の研究をした。著書に『アイヌの信仰とその儀式』などがある。正が結核の際に治療したことなどから親交があった。記念碑はアイヌ文化保存会によって二風谷のマンロー邸に寄贈されたもの。
- 5) この写真を撮った須藤功は萱野茂の家に長く出入りしており、二風谷の住民と懇意だったので依頼をされたと思われる。
- 6) 萱野茂 (1926-2006)、二風谷生まれ。二風谷尋常小学校卒業後、造林、木彫りなどの職業に就きながら、アイヌの民具や民話を収集。1972年に正と共に二風谷アイヌ文化資料館を開設。『ウエベケレ集大成』で菊池寛賞を受賞するなど、受賞多数。1994年、参議院議員に繰り上げ当選し、通称“アイヌ文化振興法”の制定に尽力した。
- 7) 二谷貢 (1928-)、二風谷生まれ。平取小学校高等科卒業後、農業、林業に携わる。インタビューは2011年2月23日、4月26日の2回、二風谷の二谷氏宅にておこなわれた。
- 8) 蓮池悦子 (1943-)、室蘭市生まれ。東京女子大学卒業後、フリーランスの記者、編集者。現在は北海学園大学非常勤講師。共訳に北海道文化財保護協会『アイヌのくらしと言葉6 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ』がある。
- 9) 松原俊幸 (1948-)、二風谷生まれ。平取高校卒業後、郵便局勤務。二風谷観光振興組合理事などを勤める。インタビューは2011年2月22日、4月27日の2回、二風谷の松原氏宅にておこなわれた。
- 10) 金成マツノートとは、登別市の金成マツ (1875-1961) が、アイヌの口承文学、ユカラを計72冊のノートにローマ字で書きつづったもの。金田一京助と萱野茂が1979年から北海道教育委員会の委託で翻訳し、一部が出版された。
- 11) 船越光次 (1948-)、二風谷生まれ。農業。インタビューは2011年2月23日、4月26日の2回、二風谷の船越氏宅にておこなわれた。
- 12) この発言は鳩沢佐美夫が書いた事件によく似ているが(鳩沢1970 [1995]:204)、これに類した失言は何度か繰り返されており、具体的にいつのどの新聞記事なのか発見できていない。
- 13) 平取町教育委員会所属の松本周次氏に、2011年4月28日、平取町教育委員会においてインタビューを行い、その後電話でも確認した。
- 14) その後平取町内では1990年に去場、1988年に荷負さるぼ、2010年に振内、2005年に貫気別ぬきべつの各集落でも地域誌が編纂された。特に去場の地域誌は二風谷を参考にして作られたという。各戸ごとの掲載は『二風谷』の方式を踏襲しているが、系図はなく、その代わりに移住年度を記載するようになっている。

これでは和人の移住者が標準になってしまい、この点で『二風谷』とは大きく異なる。

- 15) 木村英彦 (1963-)、二風谷生まれ。札幌大学中退後、二風谷にて造園土木業。インタビューは2011年2月22日と4月19日の2回、二風谷の木村氏宅にて行われた。

#### 【文献】

- アイヌ文化保存対策協議会, 1969, 『アイヌ民族誌 上・下』第一法規出版。
- チカップ美恵子, 1991, 『風のめぐみ』御茶の水書房。
- 榎森進, 1982, 「北海道民衆の発祥」札幌商科大学人文学部編『北海道民衆の歩み』札幌商科大学人文学部, 3-54。
- 船津功, 1982, 「北海道民衆史の動向」札幌商科大学人文学部編『北海道民衆の歩み』札幌商科大学人文学部, 243-314。
- 振内郷土史編集委員会, 2010, 『郷土史ふれない』振内自治会。
- 現代企画室編集部編, 1988, 『アイヌ肖像権裁判・全記録』現代企画室。
- 郷内満・若林勝, 1974, 『明日に向かって アイヌの人びとは訴える』牧書店。
- 長谷川亮一, 2008, 『「皇国史観」という問題』白澤社。
- 鳩沢佐美夫, 1995, 『沙流川—鳩沢佐美夫遺稿』草風館。
- 東村岳史, 2000, 「現代における『アイヌ文化』表象——『文化振興』と『共生』の陰」好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房, 228-250。
- , 2002, 「状況としての『アイヌ』の思想と意義——『アヌタリアイス』による〈アイヌ〉表象の問い直し」『解放社会学研究』14: 39-75。
- 本田優子, 1997, 『二つの風の谷』筑摩書房。
- 本田優子編, 2010, 『伝承から探るアイヌの歴史』札幌大学付属総合研究所。
- 色川大吉・芳賀登・斎藤博, 2006, 『鼎談 民衆史の発掘—戦後史学史と自分史を通して』つくばね舎。
- 貝澤正, 1976. 3-1982. 5, 「歴史をたずねて」『先駆者の集い』社団法人北海道ウタリ協会。
- , 1984, 「はじめに」『アイヌ史の要点(抄)』社団法人北海道ウタリ協会アイヌ史編纂委員会。
- , 1993, 『アイヌわが人生』岩波書店。
- 川上将史, 2010, 「アイヌ語を覚えて、語るということ」『日本オーラル・ヒストリー研究』6: 15-22。
- 萱野茂, 1993, 「おのおのが信じた道」貝澤正『アイヌわが人生』岩波書店。
- 萱野茂・田中宏, 1999, 『二風谷ダム裁判の記録: アイヌ民族ドン叛乱』三省堂。
- 記念事業協賛会, 1968, 『創立七五周年記念誌』。
- 北川大, 2003, 『アイヌが生きる河』樹花舎。
- 小林多寿子, 1997, 『物語られる「人生」——自分史を描くということ』学陽書房。
- 桑原真人, 1993, 『戦前期北海道の史的研究』北海道大学図書刊行会。
- 丸山隆司, 2002, 『〈アイヌ〉学の誕生——金田一と知里と』彩流社。
- 箕島榮紀編, 2011, 『アイヌ史を問いなおす——生態・交流・文化継承』勉誠出版。
- モーリス=スズキ・テッサ, 2000, 『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房。
- Munro, Neil Gordn, 1962, *Ainu creed and Cult*, London: Routledge & Kegan Paul (=2002, 小松哲郎訳, 『アイヌの信仰とその儀式』国書刊行会。)
- 二風谷自治会, 1983, 『二風谷』。
- 二宮宏之, 2000, 「戦後歴史学と社会史」歴史学研究会編『戦後歴史学再考——「国民史」を超えて』, 123-147。
- 荷負自治会, 1988, 『郷土誌におい——ダムに沈む沙流川のほとりにて』。
- 貫気別郷土誌編集委員会, 2005, 『郷土誌貫気別』。
- 小川正人, 1997, 『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会。
- 坂田美奈子, 2011, 『アイヌ口承文学の認識論——歴史の方法としてのアイヌ散文説話』御茶の水書房。
- 去場開拓百年実行委員会, 1990, 『開拓百年記念誌 さるば』。
- 佐々木利和, 2010, 「歴史資料としての口承文芸の可能性」本田優子編『伝承から探るアイヌの歴史』札幌

幌大学付属総合研究所, 25-33.

佐々木昌雄, 2008, 『幻視する〈アイヌ〉』草風館.

関口由彦, 2007, 『首都圏に生きるアイヌ民族——「対話」の地平から』草風館.

社団法人北海道ウタリ協会, 1988, 『アイヌ史 資料編 1』.

梅原猛・埴原和郎編, 1982, 『アイヌは原日本人か』小学館.

ウタリ問題懇話会, 1988, 『アイヌ民族にかんする新法問題について (資料編)』.

渡辺茂・河野本道編, 1974, 『平取町史』北海道出版企画センター.

ウィンチェスター=マーク, 2009, 「近現代アイヌ思想史研究：佐々木昌雄の叙述を中心に」一橋大学大学院社会学研究科 2009 年度博士論文.

結城庄司, 1997, 『チャランケー結城庄司遺稿』草風館.